

『常設展示』

(共通テーマ)「信濃の風土と人びとの暮らし」

--- 常設展示のねらい

長野県は中央高地に位置し、古くから東日本と西日本、太平洋側と日本海側を結ぶ結節点として、さまざまな文化の交流の場となり、独自の風土と文化をはぐくんできた。そうした風土と文化がつくられてきた歴史的背景と変遷を明らかにし、その成果を考古資料と文献史料などを活用した展示を通じて示し、信濃の歴史に触れ、歴史学習を深められる場を提供する。

--- 常設展示を構成する柱

- ・ 課題とテーマをもった展示
東アジアや日本列島の歴史のなかにおける信濃の位置と歴史的変遷の大筋を明らかにするとともに、人びとの生活と風土の諸相を具体的に示す。
- ・ 時代性を引き出す展示
時代ごとの人びとの生活を追体験できるような、臨場感あふれるものとする。
- ・ 学問のジャンルをこえた学際的展示
信濃の地方史の特徴といわれる学際的総合的な歴史研究の成果を生かして、わかりやすく、楽しく考えられるものとする。

--- 常設展示の方法

- ・ 常設展示は、歴史館に収蔵される考古資料や文献史料を活用しながら、ローテーション展示など多様な手段を用いた展示とする。
- ・ 常設展示、映像展示などは周辺史跡や屋外展示との関連を考慮して、わかりやすいものとする。

--- 常設展示の内容

- ・ 過去を追体験できるメイン展示
原始、古代・中世、近世、近現代の各時代に当時の様子を再現した実物大の環境復原模型を置き、その時代を追体験できるようにする。
- ・ テーマにそって学習できる周辺展示
各時代の特徴ある史資料を、テーマにそって展示し、より深い学習ができるようにする。
- ・ マルチメディアによる詳しい解説
周辺展示の理解を助けるために、映像と音声と文字情報で詳しい解説をする。
- ・ 各時代の植生を再現し、復原された遺構を展示する屋外展示
「縄文の森」「万葉の野」「中世の林」と遺構を配置する。

構成

1 木曾ヒノキが語る信濃の歴史

(1) 赤沢自然休養林のヒノキ（実大環境復原）

木曾ヒノキは秋田スギや奈良県の吉野スギとともに美林として名高い。上松町赤沢のヒノキ林は江戸時代から大切にされ、今は国有林として自然休養林に指定されている。

(2) 年輪から歴史を読む

現在の木から始めて、古い建物の材や遺跡から出土した材を調べた結果、古くからの年輪の移り変わりがわかってきた。そのグラフに合わせると出土材の年輪が何年前かわかり、樹皮がついていれば切った年もわかる。

2 信濃の風土がはぐくんだ原始の生活

(1) ナウマンゾウと黒曜石

先土器時代、日本列島は大陸と陸続きだったため、ナウマンゾウも渡ってきた。信濃最初の人びとは、現在の北海道なみの寒さのなかで、黒曜石などでつくった道具を使って狩猟生活をおこなっていた。

- a 最古の狩人
- b 最初に住んだ人々
- c 石器の地域性

(2) 中央高地の縄文文化

1万2000年前、木の実を集め鳥獣を狩り魚をとる食料採集を基礎とし、粘土で焼きあげた器、つまり土器を使う縄文文化がはじまった。4500年前、縄文中期の長野県の地域は、日本一の人口密集地であった。

- a 弓矢と土器の出現
- b 定住の始まり
- c 森の中の縄文文化
- d 縄文の祈りと祭り
- e 絵北村人の生活

(3) 縄文のムラ（実大環境復原）

ハケ岳山麓の森を切りひらいてつくった6000年前のムラ。立石、列石を中心として丸く広がり、半地下式の竪穴住居や、床を高くした建物、それをとりかこむ集石群からなる。収穫の秋、家の中は山の幸が満ちている。

(4) 稲をつくった信濃人

2500年前、大陸から新しい文化と縄文文化の伝統の上に、九州北部では水田稲作をする弥生文化が生まれた。200年後、長野県の地域にも、稲作の暮らしが始まった。

- a 弥生時代のムラ

(5) 古墳に葬られた人びと

4世紀ごろ、農業が生み出した富を手にした有力者が、人々の上に立った。かれらの力は、古墳に示されている。5世紀の有力者は、武人として近畿地方の有力者に結びつき、朝鮮半島との交流もあった。

- a シナノの埴輪
- b 古墳時代のまつり
- c 朝鮮半島からの文化
- d 体験用参考資料

3 信濃国のなりたちと人々の暮らし

(1) 条理と水田

人々は自然を開発し、調和を保ちながら農業を営んできた。土地に刻まれている農業の歴史が掘り出された水田跡から読み取れる。

- a 水田の跡を掘る
- b 水田と農具の変化
- c 条理水田

(2) 都と信濃

7世紀ごろ法律をよりどころとする律令政治が始まった。全国は60以上の国々からなり、国のもとに群が置かれた。信濃は10郡に分かれ、人びとはそれまでより都を意識した暮らしをおくるようになった。

- a 都へのぼる
- b 屋代木簡の世界

(3) 平安時代の村の暮らし

多くの農民が貧しくくらす一方で、豊かな農民があらわれた。彼らは11～12世紀、武力をたくわえて領主へと成長する。古文書などではわからない彼らの暮らしの実態を、発掘調査が明らかにしている。

- a 富裕農民の世界
- b 荘園と国衙

4 信濃武士と百姓の暮らし

(1) 武士の争乱と信濃

領主としての武士は、貴族などと結んで荘園や牧をひらき、騎馬戦を得意とする武装集団となった。しかし信濃は有力な大名が育たないまま、隣国大名の奪いあう場となっていた。

- a 木曾義仲と荘園
- b 一所懸命

(2) 鎌倉時代の善光寺門前（実大環境復原）

鎌倉時代には、土地の開発がすすんだ。しかし、災害・飢え・伝染病が絶えなかった。善光寺門前の日常生活とはなやかな仏の世界。ここでは現世と来世、地獄と極楽とが、隣りあっていた

- a 善光寺と中世の祈り

(3) 交通と流通

中世の信濃では、武士や寺社などが日本全国やアジア各地と盛んに交流し、たくさんの物資や文化がもたらされた。寺社の門前や荘園の要地には市が立ち、商業や交通が発達し貨幣が使用された。

- a 東アジアと信濃
- b 銭を使う人々

5 江戸時代の町と村の暮らし

(1) 領主と町・村

江戸時代になると武士は城下町に住み、役人として俸禄を得る。官僚的な制度が確立し、文書によって広い地域を統一的に支配した。年貢徴収や境界争いの記録や決め事など様々な文書がつけられ、村や町に伝達された。

- a 武士の家宝
- b 愛娘の調度品
- c 正保の国絵図

(2) 庶民生活の高まり

農家のくらしは、18世紀に大きく変わった。農業技術が進んで収穫が増し商品作物の栽培や諸かせぎも発達して収入を得、麻から木綿へ、1日2食から3食へなど、衣食住が向上し、村の社会生活も変わりはじめた。

(3) 江戸前期中農農家（実大環境復原）

前期（18世紀初め）の中層の農家はチョウナ削りのカヤ葺き屋根の住居で麻 衣料とカテ飯の生活であった。後期には、石据え柱や本棟造りの家や豪華な 絹衣裳と祝い膳が生まれた。

(4) 中馬と地場産業

貨幣経済の発達により、信濃国を通る中山道や北国街道などの街道を、様々な人や物が流通した。信濃では馬の背に荷物を積んで直接相手先へ届ける中馬といわれる輸送手段が発達した。

- a 中馬と塩の道
- b 信州中馬
- c 中山道福島宿

(5) 信州文化と民衆意識

江戸時代後半になると、庶民の手による庶民のための文化が各地で発達した。祭りの日には若者たちが化粧をして歌舞伎や人形芝居、相撲興行などを行った。庶民の生活は多様に展開し、近現代へとつながった。

- a 豪農の世界
- b 祭りの人形芝居
- c 文書の世界

6 世界につながる県民の暮らし

(1) 蚕糸王国長野県

江戸時代末から明治初にかけて外国との交流が始まると、長野県はいち早く器械製糸をとりいれた。繭・蚕種・生糸などの生産の近代化をはかった結果、日本一の代化をはかった結果、日本一の「蚕糸王国」となった。

- a 長野県の誕生
- b お蚕さま
- c 世界につながる蚕糸業
- d 近代の製糸工場
- e 工女の生活

(2) 近代の製糸工場（実大環境復原）

(3) 信州の民権と大正デモクラシー

「国会を開き人民の代表を送ろう、政党をつくろう」という自由民権運動を長野県は全国に先がけてくり広げた。大正に入ると、デモクラシーの時代風潮をうけて個人を尊重する教育や、人権を尊重する運動を展開した。

- a 観光信州
- b 信州教育
- c おもちゃ

(4) 昭和恐慌と満州移民

蚕糸王国長野県は昭和初めの大恐慌で大打撃をうけた。そこから抜け出すため県は十五年戦争のさなか、満州（中国東北区）移民を積極的にすすめた。移民者や兵士たちの尊い命が奪われ「銃後」の県民も苦しんだ。

- a 打撃を受けた県民の暮らしと満州移民
- b 戦時下の県民の暮らし
- c 満州移民と15年戦争

(5) 地域とくらしの変化

1945年、終戦を機に日本は民主主義の国として再出発した。1960年代から経済は大いに発展し、生活も向上した。そして今県民は過疎過密問題や開発と環境との調和など新しい問題に直面している。

- a 現代の光と影
- b 経済の復興と庶民の暮らし
- c 長野県の高度経済成長
- d 長野県人口のうつりかわり